教員養成系学部における絵画教育内容の構造化についての研究

-A Study on the Structure of the Contents in Painting Education at the Faculty of Education-

小澤基弘（教育学部・教授）
KOZAWA　Motohiro

【研究の目的とそこに至る経緯】

本研究は、教育学部美術教育講座における諸教科専門科目のなかで、特に筆者が専門とする「絵画」の教育内容を今一度見直し、その総体と構造を明確に定義し位置づけることを目的とする。絵画に限らず美術における教科専門科目の教育内容は、それぞれの教員が制作者としての自己体験を基点に据えながら、教育内容を個別に設定し実施しているのが現状である。もちろん「絵画」も然りであり、そこにはある統一された教育内容の構造は志向されておらず、あくまで主観的なものにとどまっているのが大勢であると言えよう。

子供の多様性やユニークさを引き出すことを旨とする現代の美術教育に対して、構造化という「統一」を求めること自体、パラドキシカルな問題を含んではいる。しかし、義務教育の教科としての「図工・美術」の存在を前提とし、それを教える教員を養成することが教育学部の使命であることを思えば、教科専門の教育内容の「核」の明文化を回避することはできない。美術教育における「個別性・多様性」への志向と,「統一化・構造化」というパラドックスをどう了解するべきか、そのこと自体を問い直すことから本研究は始められねばならない。

つまり、義務教育における教科「図工・美術」を通して、子供たちは一体何を獲得すべきかという本源的問題である。その視座に立った上で、現場で教える教師を育成する教育学部において教員は「絵画」を通して何を学生に伝えるべきか、その教育内容の核を明確化し、それを具体的にどのように構造化していくかが、本研究の具体的目的である。これは「絵画」に留まるものではないことは明白である。美術における他の教科専門（彫刻、工芸、デザイン）また学部他領域の教科専門科目においても、全く同様な志向がなされるべきであろう。その意味では、筆者の本研究は今後そうしたムーヴメントを喚起する目的も大いに孕んでいる。

【平成 18 年度における研究の状況と今後の展開】

《平成 18 年度の研究状況》

平成 18 年度は、2001 年に編者として関わった『絵画の教科書』（日本文教出版）において筆者が構造化した「絵画」に関する諸事項の見取り図の再検討を行った。そこでは絵画に関わる 180 の事項を系統的に整理し、それらを組織付けた。その作業の中から理解したことは、「絵画」のもつ多様性と深さであり、内容の豊富さである。こうした多様性や豊か

さは、系統的に絵画に関する事項を構造化したことで初めて実感として理解できた。つまり、多様性や個別性を伝えることと教育内容を構造化することは矛盾しないという結論にこの作業を通してまずは至ることができたのである。そのことが平成 18 年度の本研究における一つの成果である。つまり、絵画教育の内容の視座が明確化されたのである。

《次年度以降の研究への展開》

こうした視座に立ちつつも、180 にも及ぶ絵画に関する重要な事項のなかで、義務教育のなかで確実に子供たちに伝えねばならない事項を絞り込む作業が未だ残されている。この作業は次年度の継続研究を待たねばならない。その作業と同時に、全国の国立大学法人の教育学部における絵画に関わる授業内容（シラバス）の検索とその分析の第一段階を現在進めているところである。各大学の教育学部絵画担当教員がどのような教育目標をもち、どのような授業計画を立てているのかを参照することは、本研究においては極めて有意義である。本研究は平成 19.20 年度の科学研究費補助金（基盤研究（C））を獲得しており、平成 18 年度プロジェクト経費において行った本研究の序盤は、今後科学研究費を主な拠り所としながら発展的に継続研究を可能とする環境が整ったことになる。そうした援護を受けつつ、シラバス分析を次年度も継続して行い、全国の教育系大学の絵画教育内容の大きな傾向を把握したい。そこでまとめられた現在の絵画教育の現状を、筆者の絵画事項の構造図と照らし合わせながら検証し、更に網羅的な教育内容の構築を目指したいと考えている。

平成 19・20 年度の二年間については、前述したように科学研究費補助金（基盤研究（C））を受けており、研究の展開が可能な状況となっている。次年度の以降の研究の展開は、科学研究費の共同研究者として千葉大学教育学部で絵画を担当する加藤修准教授に参画いただくことになっており、従って研究は更に客観的・多角的なものとなるはずである。まずは小澤・加藤による上記シラバス分析を行い、その結果に基づきながら、絵画教育内容の雛形を具体的に作成することを本研究の第一段階の一つの区切りとする予定である。

【付記】

また上記研究以外にも、本プロジェクトに関係する研究も本年度は同時に行った。それは具体的には制作プロセスのなかから立ち上がる諸問題について、特に絵画の完成の問題、また自己表現の核の模索としての「ドローイング行為」の意味の明確化である。これらの研究成果は、単著『絵画の思索－絵画はいつ完成するか』（花伝社、2006 年）としてまとめることができたことを付記しておく。この研究成果は、本プロジェクト研究へと確実に活かされて行くと考えている。